パートナー情報誌

香　澄

第 18 号
発行日：2010 年 12 月 10 日
発行人：パートナー情報誌「香澄」編集部会
編集員：浅野明宏、有吉潔、稲葉寛、尾形孝彦、
栗原知彦、中村利夫、平江俊之、安川敏行、
深澤幸義、高橋慎、松本忠士、中根尚美

H２２年度パートナー全体交流会

秋晴れの 11 月 21 日（日）恒例のパートナー全体交流会が霞ケ浦環境科学センター多目的ホールで多数のパートナーが参加（31 名）して開催されました。この会は、パートナー同士がグループを超えた交流促進を目的に年１回の頻度で開催され、今年で４回目となります。開催内容としましては、主に外部講師をお招きしての講演会や各グループの活動紹介、そしてセンターの研究室からは身近なテーマについて話をしてもらう等、内外の専門家から貴重な話を聞くことができる機会でもありました。

さて、今回の午前の部は、今年度、第 12 回日本水大賞を受賞されました認定 NPO 法人「宍塚の自然と歴史の会」の及川ひろみ理事長による「里山保全活動について」の講演があり、取組みの動機や当時のご苦労など、自らの体験を通しての「里山」に懸ける情熱あふれる活動内容に、私達は２時間と言う時間を忘れてしまうほど感動を受けました。本講演は、今後の私たちの活動にとって大変有意義なものとなりました。

昼食は、身体の芯から温まる特製の豚汁を美味しくいただきました。午後の部は各グループの活動状況の紹介があり、お互いに他グループの活動内容を確認し合いました。次に、センター湖沼環境研究室　中村剛也技師による「霞ヶ浦のプランクトンについて」話をして頂きました。プランクトンは湖沼の生き物を支えている小さな生き物たちですが、その種類、活動及び影響力や役割などを専門的な見地からも聞くことができ、あらためて奥の深さを実感しました。

最後に、参加者の皆様にパートナー全体交流会及びパートナー活動に関するアンケートをお願いし、閉会しました。なお、当日参加された皆様からのアンケート結果は次ページをご覧頂きたいと思いますが、これらアンケート結果を踏まえ、企画部会としましては、更に充実したプログラムを検討し、全体交流会の継続実施に向け取り組んで行きたいと思います。パートナーの皆様のご協力をお願い致します。

注）日本水大賞：安全でおいしく、きれいな水にあふれる日本を目指し、水環境の健全化に貢献した活動を顕彰する。

記：尾形

交流会参加の皆さん

及川ひろみ理事長の講演

特製豚汁の昼食

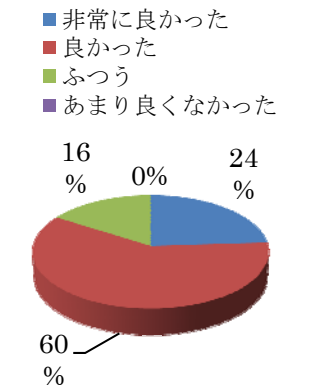
中村剛也技師のプランクトン講座

Ｈ２２パートナー全体交流会およびパートナー活動に関するアンケート

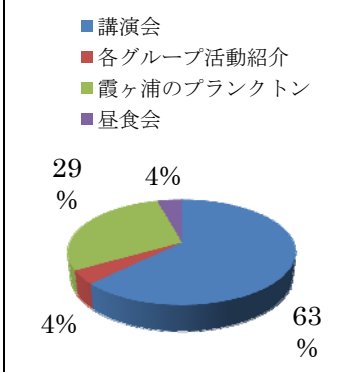
1.　全体交流会について

（当日参加された方々のうち２５名から頂いた回答の集計です）

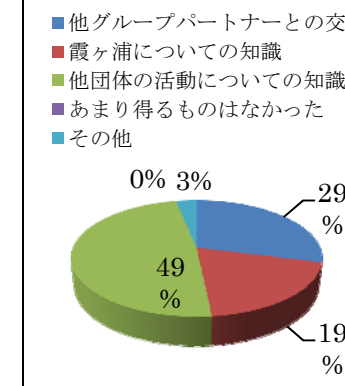
(1)今回のパートナー全体交流会に参加してみて如何でしたか



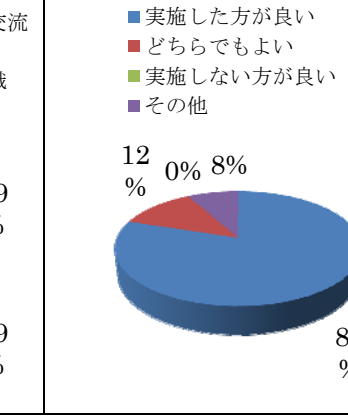
(2)一番良かったプログラムはどれですか



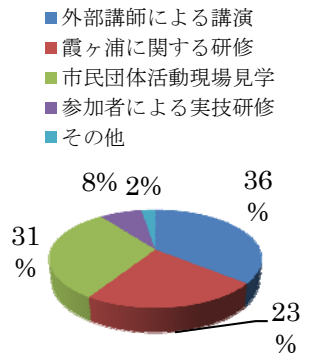
(3)全体交流会に参加してどんなことを得ることができましたか



(4)今後とも全体交流会を実施した方が良いと思いますか



(5)今後の全体研修にどんなプログラムを取り入れてほしいですか



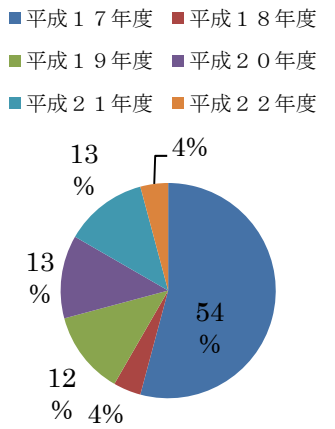
質問１では「良かった」又は「非常に良かった」と回答した人が全体の 84%を占め、質問３の得られたものとして「他団体の活動についての知識」「他グループパートナーとの交流」「霞ヶ浦についての知識」とバランス良くあげられており、研修・交流という目的は一定程度達成されていると思われる。また、質問４では 80%の人が「今後とも実施した方が良い」と回答しておりイベントとして概ね好評で今後とも実施して行くことの要望が強いことが窺える。

質問２の良かったプログラムとしては「講演会」「霞ヶ浦のプランクトンについて」を挙げた人が多く、質問５の今後の希望としては「外部講師による講演」「市民団体の活動現場の見学」「霞ヶ浦に関する研修」が多く、外部からの情報や最新の知識に触れられる機会を作ることが求められていると考えられる。

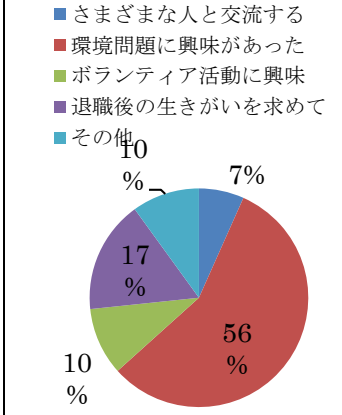
今後ともこれらを含めたプログラムの企画を検討し、さらに充実した全体交流会の継続実施を進めることが必要である。

2.　パートナー活動について

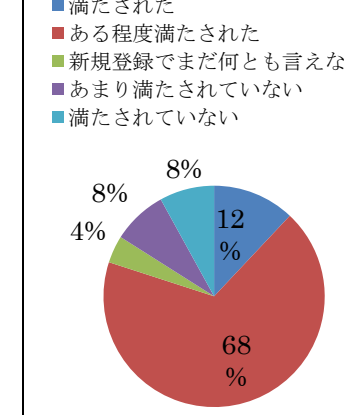
(1)センターパートナーに登録した年度を教えてください



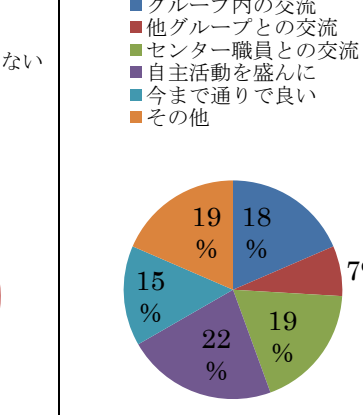
(2)パートナーに登録しようと思った理由（目的）を教えてください



(3)実際にパートナー活動を行ってみて、登録時の目的は満たされましたか



(4)今後のパートナー活動に期待することは何ですか



登録した理由では「環境問題に興味があった」を挙げる人が多く環境（霞ヶ浦）問題に高い関心を持っていることが窺える。目的は「ある程度満たされた」「満たされた」という回答が８割を超えているが今後の活動については様々な期待があり、それぞれのパートナーが多様な活動を選択できる“しくみ作り”も必要と考えられる。

グループ活動報告

研修グループ

移り気な秋の天気も、研修グループ初企画に圧倒されたのか晴天の９月 19 日、研修グループ有志 12 名、アドバイザー３名はセンターの研修室から桜川フィールドへ期待と少しの不安を胸に武者修行よろしく飛びだした。

企画の狙いは、フィールドに出て実際に水質調査を体験し、フィールドならではの水の実態を知り、水質調査の技術・知識のノウハウを習得し、パートナーのスキルアップを図り、それが環境意識の啓発に結びつけばと考えました。

そしてその成果物として、水質調査のノウハウ集の作成・水質マップ（テトラダイヤグラム）の作成、将来的にはスキルを活かして、市民団体とのコミュニケーションの場作りにも活用していきたいと考えております。

調査場所は、桜川の河口から源流までの４地点、水神橋下（土浦市虫掛）、泉山橋下（つくば市北条）、樺穂橋下（桜川市真壁町）、桜川源流の鏡ケ池（桜川市岩瀬）で調査を実施しました。

測定項目は、水温・pH・COD（化学的酸素要求量）・硝酸態チッソなど８項目を３班に分かれ、アドバイザーの指導を受け、汗だくになりながら測定機材を使い測定、記録を行いました。源流の状況ですが、V字の狭い谷を清らかな水がチョロチョロと流れ、小さな鏡ケ池に注いでいました。

あの大きな桜川もここが出発点となり、やがて霞ケ浦に流れつくと思うと、自然の営みにあらためて感動しました。

最終地点である源流の鏡ケ池での調査も終わり、やり遂げた爽やかな汗をぬぐっての昼食は格別でした。鏡ケ池を背に笑顔の集合写真を撮り、初めての自主企画も無事に終わり、帰路につきました。今後の自主活動の展開としましては、これを糧に次の目標に向け、活動して行きたいと思います。

（尾形）

イベント・記録グループ

イベント・記録グループの今年度のテーマである『センター周辺のウォーキングマップの作成と利用』の活動について報告します。ウォーキングマップは戸崎コース、沖宿コースの二通りあり、戸崎コースは昨年度完成して現在は実際に運用を始める所です。沖宿コースは下記二通りを設定し調査しております。コース設定としては約５ｋｍ、1.5 時間以内を考えています。

海蔵寺

１）歴史コース（仮称）は鷲神社→鹿島神社→三峰神社→海蔵寺を廻る寺・神社を中心とした歴史を感じ、またいろいろな伝説があって興味あるコースです。鷲神社は古木が生い茂る参道は見応えがあります。鹿島神社はごく一般的な神社ですが源義経伝説が登場するという面白い神社です。海蔵寺は第９代小田治朝が菩提寺として開祖したと言われている寺で、ご住職は花が好きで季節の花が楽しめます。（約５ｋｍ／1.2ｈ、371ｋcal、おにぎり 2.3 個分）

鷲神社参道

２）湖岸コース（仮称）蓮田と多種類の植物も見られる湖岸コースです。このコースは主に湖岸の植物を観察しながらウォーキングするコースです。海蔵寺→沖宿堀之内館→湖岸を廻るコースです。沖宿堀之内館跡は第９代小田治朝または小田家に関連した館ではないかと伝えられています。湖岸はオニグルミ、ハンゲショウ、ノアズキ等が見られ、その他にも種々の植物がみられるので四期毎に変わるのを観察するのも良いかと思います。（約５ｋｍ／1.2ｈ、282ｋcal おにぎり 1.8 個分）

なお『センター周辺のウォーキングマップ』の利用は現在試行中で、センターパートナーの方に限定させていただきます。今後一般の方にもご利用できるように検討中であります。

（栗原）

図書グループ

文献資料室には、絵本から専門書まで約 25,000 冊の蔵書があり、7,000 冊位貸し出し可能です。その中には、地球科学・地学・地質学（地球、水、川、海、土など）、生物化学（生物、植物、動物などの生き物）そして土木（環境など）に関する本が特に沢山あります。ここにある蔵書を多くの皆さんに知ってそれを利用していただくために、図書グループでパートナー活動の一つとして、図書紹介文の作成をおこなっています。昨年から現在まで 122 件ほど作成してきました。大部分は子供向けの紹介文（全体の 96%）で、その内訳は、地球科学・地学・地質学に分類されるものが 31%、生物化学が 36%、環境が 16%、その他（農家の暮らしや絵本など）が 17%の割合です。作成した紹介文は、2 階の交流サロンでファイル保存し、そのうち数点は壁等に掲示してありますので、多くの皆様に利用していただければと思います。

図書紹介文を 1 つ紹介したいと思います。最近、クマの大量出没で「里山」の崩壊が叫ばれ、また、10 月名古屋で開催された COP10 で、「日本の里山のような自然の利用法を世界で推進」を日本から発信しています。この「里山」について 30 年間見つめてきた写真家の記録です。（平江）

書　名　『今森光彦フィールドノート　里山』
著　者　今森光彦／出版社：福音館書店

「おすすめ」

滋賀県の琵琶湖の西側（湖西地方）における、里山の田んぼや雑木林とそこに暮らす人たちのいとなみを、約 30 年間（専用のアトリエを作ってから 15 年）にわたって、カメラマンである著者が記録したものです。カメラが切り取った生き物たちの生態や、そこに共存する人の日々の作業や四季などが詰まったアルバムです。著者は、この本が里と付き合うための一つのきっかけとなればと提案しています（細）

魚グループ

今年度も活動としては自然観察会と魚の定点調査およびセンターのイベントの補助を行っている。

9 月までに自然観察会は第 2 回の桜川が中止になり 4 回行われ、パートナーの参加人数は表の通りである。桜川の観察会は当初 6 月に計画されたが、降水による水位上昇のため中止となり、9 月の湖畔での観察会を桜川に変更し再度計画をしたが、またも水位の上昇で桜川での観察会は中止となり、湖畔での観察会に切り替えた。霞ヶ浦以外での観察会は楽しみでもあり、2 回も中止で残念である。

魚の定点調査は 7 月から新人の新関さんが加わり、大須賀さんの指導の下、投網を担当することになった。4 月から水質調査地点を投網の場所と一致させた。また、魚調査担当者は魚がたくさん採れるとそのカウントなどに時間がかかることから、水質担当者も魚調査に協力するようにした。昨年の夏はワカサギがたくさん採れたが、今年はテナガエビがたくさん採れ、調査に時間がかかった。8 月の定点観測は猛暑のため魚調査は途中で打ちきりとした。

センターのイベント補助は 5 月のこども環境フェスティバルと 8 月の夏祭りで、いずれも投網教室を行った。霞ヶ浦にどんな魚が住んでいるかを学んでもらうため、投網ができない小さい子供向けに、今年の夏祭りでは魚釣りゲームを行い大盛況であった。参加したパートナーは 5 月が 3 人、8 月が 4 人で、8 月は魚釣りゲームも行ったので、結構忙しかった。次回からはパートナーの人数をあと 1 人か 2 人増やしていただきたいと思う。

自然観察会

	5 月 1 日	6 月 19 日	7 月 19 日	8 月 7 日	9 月 18 日
内　容	フナののっこみ	桜川の魚観察	昆虫観察会	投網教室	霞ヶ浦の魚観察
パートナー参加人数	5 人	中止	4 人	6 人	8 人

定点調査

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月
パートナー参加人数	7 人	6 人	6 人	8 人	5 人	7 人

（腰塚）

平成22年８月 植物ｸﾞﾙｰﾌﾟ「湖岸植物 定点観察」ﾊﾟｰﾄﾅｰ活動の抄録

（文責：植物Ｇリーダー　有吉）

《A・B区 観察の概況》　観察日：2010-8-24(火)

日照り続きで酷暑の中、蔓草のガガイモやヘクソカズラは満開の花盛り、掘り込みの浅い新南池は水枯れでサジオモダカやミズアオイは枯死寸前。連絡水路のマツモは益々繁茂、トチカガミは可憐な白い花を咲かせている。

タコノアシ　準絶滅危惧種、県希少種の多年草。花や実が蛸の吸盤に類似。

トチカガミ　準絶滅危惧種の多年草.根が水中を漂う“浮遊植物”。

マツカサススキ　ｶﾔﾂﾘｸﾞｻ科の多年草。小穂が丸く集まっている花穂が松毬に似ていることでこの名(松毬薄)が付く。

《E・F区 観察の概況》　観察日：2010-8-25(水)

今年は猛暑に加え干天が続き、植物達は水不足に喘いでいるが、つる植物のガガイモ、ヘクソカズラ、ノブドウ等は花満開だ。コバノカモメヅル(和名：小葉の鷗蔓)が定点観察区域（G区）で初めて見つかった。

ガガイモ（ｶﾞｶﾞｲﾓ科）つる性多年草。大きな群生が見られ芳香が漂っていた。

ミズタマソウ(ｱｶﾊﾞﾅ科)　多年草。かぎ状の白い毛が密生する丸い果実が特徴。

コバノカモメヅル（ｶﾞｶﾞｲﾓ科）つる性多年草。葉腋に暗紫色の小花を付る

《G・H区 観察の概況》　観察日：2010-8-25(水)

G・H観察区域全体で、クズやヤブガラシ、カナムグラ等のつる性植物が繁茂し、他の植物を覆い尽くしている状態であった。G区旧養魚池畔のシロバナサクラタテは満開であったが、サクラタデとシロバナサクラタデの継続調査地H区では未だ蕾も付けていない。

ノアズキ（ﾏﾒ科）別名：ヒメクズ巴状の花がたくさん咲いていた。

ヤブガラシ（ﾌﾞﾄﾞｳ科）つる性多年草花には蜜を求めて多くの虫が集まる。

クズ（ﾏﾒ科）　つる性多年草秋の七草の一つ。花を咲かせ始めた。

平成22年９月 植物ｸﾞﾙｰﾌﾟ「湖岸植物 定点観察」ﾊﾟｰﾄﾅｰ活動の抄録

（文責：植物Ｇリーダー　有吉）

《A・B区 観察の概況》　観察日：2010-9-22(水)

久しぶりの雨で池にも水がたまり、ヒシ、トチカガミ、アサザなどの水生植物が元気になっている。ヨシやマコモの花が咲き、湖畔には秋の気配が漂ってきた。

ミズアオイ（ﾐｽﾞｱｵｲ科）１年草の危急種。背後地ハス田に群生：花盛りで見事。

ヒメジソ（ｼｿ科）　１年草。葉の香りに癒される。

イボクサ（ﾂﾕｸｻ科）　１年草の１日花。可憐な花が魅力的。

《E・F区 観察の概況》　観察日：2010-9-22(水)

今年は彼岸が来ても残暑が殊のほか厳しいが、シロバナサクラタデやヒガンバナの花が咲き始め、ビナンカズラ、ガガイモ、ノブドウなどが青い実を付け始めた。特定外来植物であるアレチウリの猛繁殖が心配だ。

マメアサガオ（ﾋﾙｶﾞｵ科）　つる性１年草。花の色に白とピンクがある。

アレチウリ（ｳﾘ科）つる性１年草。カワヤナギを覆い尽くしている。

ガガイモ（ｶﾞｶﾞｲﾓ科）　つる性多年草。大きな実が生った。

《G・H区 観察の概況》　観察日：2010-9-22(水)

つる植物が旺盛でサクラタデの群生地がカナムグラに覆われてしまっていた。先月に続きノアズキ（ヒメクズ）の黄色い蝶形の花がきれいだった。

イシミカワ（ﾀﾃﾞ科）　“つぼみ”托葉がｴﾘﾏｷﾄｶｹﾞの様に茎を取巻く。

キンガヤツリ（ｶﾔﾂﾘｸﾞｻ科）H区に初めて出現した１年草。

サデクサ（ﾀﾃﾞ科）　茎や葉柄に刺があり、なでると痛い。１年草。

北海道の屋根：大雪山（旭岳、十勝岳）登山記

私は、ボケ防止と健康管理のため家内と共に登山のグループに入り、月２回程度山登りに参加しています。今回は北海道の最高峰「大雪山系」(大雪山と云う山はなく、道央に広がる膨大な火山群を総称して云う。)の旭岳(TP 2,290m)と十勝岳(TP 2,077m)に登ります。 北海道の山は緯度の関係から 2,000m級の山は、本土の 3,000m級に相当します。家内は昨年同時期の遭難事故のことなどもあり北海道の山行きは嫌がり、今回は私のみグループ（穂高倶楽部 代表 塙　衛）参加者 21 名の一員として参加しました。

7 月 16 日（金）　早朝羽田を発った ADO 31 便は夏休みに続く連休の前日とあって満員の乗客、約１時間 45 分のフライトで旭川空港に到着。チャーターバスで**旭川動物園**（噂ほどの規模ではなく、山の斜面を利用しているため上り下りが大変。透明のトンネルカプセル内を泳ぐアザラシやペンギンは見応えがある。）と**層雲峡**（３万年前の氷河期、旭岳の大噴火により流出したマグマが急激に冷えて出来た火山岩を、24km にわたり石狩川の流れが削って造った、垂直に切り立った断崖絶壁が続く日本最大の柱状節理の渓谷で、高さ 200mに達する“神削壁”や“大函・小函”が有名。）を見学して旭岳登山口である「旭岳温泉・グランドホテル大雪」に宿泊。

17 日(土)　ホテルで朝食の後、朝１番の大雪山旭岳ロープウェイで TP1,600m の姿見駅へ、ここで準備体操ののち噴煙の上がる旭岳が水面に映る「姿見の池」を横目に歩き始め、火山灰のガレ場と火山礫のゴロゴロするジグザグの道を登ること１時間半、続いて爆裂火口の稜線を急登すること１時間ようやく旭岳頂上に到着。天気は上々、遠くはトムラウシ山から道内２番目の北鎮岳、黒岳など 360°大雪山系２千m級の山々が一望に！！これぞ登山者冥利を満喫。間宮岳から裾合平の旭岳北麓を周遊する健脚組と別れて往路を折り返し下山。周遊組の到着を待って明日の登山基地「白金温泉・大雪山白金観光ホテル」にバスで向かう。途中から雨となって明日の天気が気にかかる。

18 日(日)　昨夜からの雨が一段と激しくなり朝食に持たされた“おにぎり弁当”をホテルで食べながら待つこと１時間弱、雨が小降りになったので十勝岳登山口の**望岳台**(TP 930m)に向かった。ここで入念な準備体操の後ガスがかかって姿を見せない山頂を目指して出発。なだらかな傾斜の泥流跡を登ること１時間、新築の避難小屋に到着。一休みののち沢を渡ったところで次第にガスが濃くなってきた。ここから急斜面の火山礫の尾根道をジグザグに登ること一時間余、登山道にケルンがある稜線に出た。地図を見るとこの左手が昭和噴火口(TP 1,630m)らしいが雲の中で右も左も何も見えない、強い横風に煽られるなか一列縦隊で登るが三人目から前は見えない、風は益々強くなり立ち止まると吹き飛ばされそうになる、稜線の幅も見えない。この状態では危険！！と折り返し下山することになった。残念だが命には代えられない。

19 日(月：海の日)　昨日の雨とは打って変わった晴天。山を下り富良野のワイン工場やチーズ工場を見学、ラベンダー畑の農場は休日とあって入るのに渋滞の盛況。昼食はジンギスカンと生ビールで乾杯。**美瑛のパッチワークの路**（大きなそれぞれの畑に色々の作物が折り重なって作付けされている北海道畑作地帯特有の農村風景）をあちこち見物して、旭川空港から満席の JAL1112 便で帰途についた。

姿見の池に写る噴煙を上げる旭岳

旭岳頂上にて。右下に一等三角点が

十勝岳　望岳台にて（下山後）

（有吉 潔）

ご近所探訪（5）　手野城（館）跡を訪ねる

手野城は、国道３５４号線の手野坂西側、前回訪れた「手野六カ寺」の一つ、法光院を含む標高１０ｍほどの台地上にあった。昔からこのあたりは、「立（館）」、「館の台」などと呼ばれていたそうだが、現在、城域の西側は、常磐線の建設のため大きく削られ、南端は、土の採取で大幅に崩されている。北側は、深い空堀とおぼしき遺構がまだ残っている。

法光院の左側にある地蔵堂脇の坂（ちなみに地蔵坂という）を登っていくと、開けた畑地と法光院の墓域になるが、ここが外廓にあたると思われる。南方向に食い違いの細い道を進むと、両側の竹林や藪で判りにくいが左右に堀の痕跡が見える。この堀を渡る土橋（？）を越えて右手に広い畑地が現れるが、ここが二の廓。さらにその先の 25m×80mほど

(写真：石橋供養塔。近くの常福寺にある法印雄端の墓石と形がよく似ている）

の空間が、主廓部分と推定される。主廓の南西部に虎口らしき部分を指摘する研究者もいる。南端の少し低くなった部分が腰廓で、主廓を囲んで延びている。明確な遺構は少ないが、崖の上から周囲を見渡せ、下の鹿嶋参道に続く街道を掌握できるなど、城の立地としては適していたものと思われる。

手野城は小田城の支城だったが、その頃を記した資料は豊富で、城主としていろいろ名前が出てくる。特に戦国時代には、だまし討ちや攻防戦など、武将たちの様々な悲喜劇がここ手野城を舞台に繰り広げられたが、詳細は別稿に譲る。

西南方向から眺めた手野城遠景

永く伝えられる昔話をひとつだけ。手野城が南からの軍勢の「逆水攻め」に合い、子供たちが必死の覚悟で水汲みに城を下りるところを、敵の矢にことごとく射られ、水汲み用の竹筒だけがカラコロと地蔵坂に響いた。以来、この坂を「カラコロ坂」と呼んだという悲劇があった。この昔話は何百年も語り継がれ、哀れに思った常福寺の住職、法印雄端（前号を参照）によって、鏡石の供養塔が建てられたという（「土浦のむかし話」土浦市文化財愛護の会）。この「石橋供養塔」（文化二年／1805）は、手野館下に現存する。

今年の春、手野城の東 2.5ｋｍほどの道路建設予定地が発掘調査され、断面がＶ字状の大規模な堀跡や虎口と思われる溝跡などが発見された。手野城の関連施設と考えられるという。なお現地はすでに埋め戻されている。（細谷）

第 52 回霞ケ浦入門講座現地講座

水戸市水道水源：楮川ダム、浄水場。石岡台地の農業用水源：第二揚水機場の訪問

平成 22 年 9 月 30 日（木）

水戸市の水道は江戸時代の寛文年間、笠原地区の湧水を水源に誕生しました。国内 18 番目の水道で笠原水道として有名です。昭和初期には那珂川伏流水の利用が始まり、現在楮川、開江、内原の 3 浄水場があります。那珂川河口からも約１８ｋｍ地点の枝内取水塔でポンプアップし、楮川ダムへ送水しています。楮川ダムと楮川浄水場は昭和 61 年から運用されている。

浄水場

楮川ダム

一方小美玉市高崎地先の霞ケ浦（高浜入）から取水し石岡、笠間、行方など 7 市町の農地に霞ヶ浦の水を送っているのが、石岡台地土地改良区です。国営事業として昭和 46 年着工、平成元年に 3 つの揚水機場や用水路が完成した。

今回は水戸市の楮川浄水場と石岡土地改良区の揚水機場を訪問、県央地域の水源事情について理解を深めました。

（中村）

「パートナー情報誌　香澄」原稿募集

常時原稿を募集しておりますので是非ご応募ください。

特にテーマは設けません。パートナー自身のプロフィールやセンターでの活動体験記、身の回りの話題、また俳句・川柳・写真など何でも結構です。

原稿は、センター２階パートナー室の“香澄メールボックス”にお入れください。

「香澄」第 17 号記事の一部訂正について

- ４ページ《E・F 区 観察の概況》マメグンバイカズラは、マメグンバイナズナに
- ４ページ（写真：**イヌドクサ**のコメント）葉の先端に・・・は、茎の先端に・・・に
- ４ページ（写真：**ビナンカズラ**のコメント）上は雄花、下は雌花。は、上は雌花、下は雄花。に
- ４ページ（写真：**シロバナサクラタデ**のコメント）サクラタデの亜種。を削除

編集後記

30 坪ほどの家庭菜園には、今 15 種類ほどの野菜がはびこっています。毎日のように食卓を賑わすふだん草、小松菜、ほうれん草、サトイモ。間もなく収穫期に入る白菜、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワー、ねぎ、レタス、にんじん。じっと寒さに耐え、来春一気に繁茂する“はず”のニンニク、ねぎ、玉ねぎ、ラッキョウ。不揃いで虫の穴だらけですが、それでも自分で育てた野菜の味は格別。寒い時期、取立ての野菜を無造作にぶち込んだ熱々のけんちん汁は、これからの我が家の定番です。（H）